

論文番号	9 (第 11 回研究会 2013.11.23 於 恵泉女学園大学)
タイトル	初級日本語学習者に導入すべき副詞 125 語の選定 －母語話者の使用実態を通して－
著者名(所属)	島崎 英香 (恵泉女学園大学 人文学研究科 修士課程)
連絡先 Eメール	jukah@nta.pial.jp
論文内容	<p>(背景および研究目的) 副詞は、主に用言を修飾することにより物事や話し手の気持ちを詳しく表現し、会話を円滑に運ぶという働きをする。しかし、副詞は文の骨格に関わらないため、特に初級レベルではあまり重要視されておらず教師も注意して教えているとは言い難い。本研究では、初級日本語学習者が副詞を使って発話量を増やし、できるだけ自然で表現豊かな実践的会話力を習得するために副詞を選定することを目的とする。</p> <p>(検討方法等) 副詞選定のため、まず 4 種 8 冊の初級日本語教科書から副詞を収集し、次に日本語能力試験『出題基準』3・4 級の副詞を加え、さらに日本語母語話者の使用実態を調査するため国立国語研究所の日本語話し言葉コーパス (以下 CSJ) の対話から副詞を収集し一覧表を作成した。 CSJ を使用することにより日本語母語話者の対話における副詞の使用頻度が明らかになったが、初級レベルに相応しいか否かの問題がある。そこで CSJ、初級教科書、日本語能力試験『出題基準』3・4 級の一覧表にある副詞約 300 語を初・初中・中・上級のレベル別に振り分けてもらうため日本語教師 20 名にアンケート調査を行った。 また、全語数の副詞の占める割合は、4 種 8 冊の初級日本語教科書では平均 3.4%であるが、CSJ では 5.4%となっており、『出題基準』3・4 級では約 6%となっていた。このことから、少なくとも話し言葉の異なり語数である 5.4%から 6%程度は増やすべきなのではないかと考え、初級教科書の必要な総語彙数を 2000 語として、選定する副詞の目安を 120 語とした。この目安を基に、選定の第一段階として初級教科書 4 種 8 冊から 3, 4 種共通の副詞を 51 語収集した。第二段階は、初級教科書の全ての副詞と『出題基準』3・4 級の副詞をリストにして共通の副詞 58 語を選んだ。第三段階として選定する副詞の目安を 120 語としたことから CSJ150 位を目安に初級教科書、『出題基準』3・4 級の副詞を見て上位から収集した。第四段階では、アンケートを加え CSJ の頻度が高い副詞、アンケートの得点が高い副詞を選んだ。</p> <p>(結果および考察) 以上の結果から最終的に 125 語の副詞を選定した。 初級日本語教科書で使用されている副詞と CSJ の副詞の使用頻度を比較すると、日本語初級教科書では「よく」「もう」「とても」等の程度副詞が高頻度を占めている一方、CSJ では「やはり」等の陳述副詞が高頻度で表れていたが、教科書では数回しか使われておらず、CSJ で高頻度で使われている「やはり」等はもっと初級から使用すべきなのではないかと考えた。その反面、CSJ で高頻度で現れていた陳述副詞「いちおう」「わりと」等の副詞がアンケート調査では得点が低くなっており、これらの副詞を初級から導入することは困難であると考えた。さらに初級教科書や『出題基準』3・4 級では扱われていない「ときどき」「いらいら」「きらきら」等のオノマトペがアンケートで高得点を得ており、CSJ で使用頻度が高いこれらの副詞は初級から導入すべきだという日本語教師の考えがみられた。</p> <p>(結論) 以上のように、初級日本語学習者のための 125 語の副詞を選定した。125 語の特徴をみると現在初級日本語教科書や日本語能力試験『出題基準』3・4 級では扱われていないオノマトペ等の情態副詞や「けっこう」「なるほど」等の陳述副詞があった。</p>
主な参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・国立国語研究所(1991)『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』国立国語研究所 ・大関真理(1993)「日本語学習者用教科書の副詞語彙」『言語文化と日本語教育 5』お茶の水女子大学日本言語文化学会 ・秋元美晴・押尾和美 (2008)「新しい日本語能力試験のための語彙表・漢字表作成中間発表」『日本語学』9 vol.27-10